教材研究

村の生活（その一）

——はじまり——

富来隆

一、村はどのようにして始まつたか

(1) 縄文時代から彌生時代への移り変りを、農業の始まり・村や国の起りとして捉えることが出来る。そこで種々の考古学的知識が動員されるわけだが、現代の様に道具が発達し然も農業に必要な田畑も住家も揃つていてさえ、毎年の苦しみが大きいのに、二千年以上もの昔に始めて畑を起し田を作るのは並大抵の努力ではあるまい。そこでこの様な努力を理解するのには、考古学的知識—主として道具—も必要だがそれよりも先にすることがありはしないか。努力を知る為には努力から入つてゆき、次に道具を比較し、社会構成を調べるという順序が立てられるべきではないか。村の開拓の苦しみは今でも諸地方に行なわれている。また一般農家の苦しみは生徒たちに生活化さえしているのだ。そこから導入するのが最も分りやすいのではないだろうか。

(2) ムラという呼び名は、ムレ・フレ等とも云われ、朝鮮語の系統だとも云われるが、また山のことをムレとも云うので、その点は幸いに大分県にはムレと呼ばれる山が沢山残つているし、その麓には由緒・伝説に富んだ古めかしい部落が数多くあるので、ムラの発達や変遷を知るのにゝ都合が良い。山と部落との関係、地形、考古遺物、道路の変化など、生徒と共に一日二日歩いてまわれば收穫はすこぶる大きいものがあろう。

(3) 始めから水田耕作されていた所は別として、その多くは川や池の灌漑による水田化が行われたものであろう。したがつて溜池や井路の作業に関する知識が必要となるし、それもまた現在の築堤や井路の事業と比較して苦労が一入身にしみるだろう。だが水田化の努力の以前に、そこが畑であつたと思われるのだから当然畑についての考察が先に立つ。ことに森林や藪を切りひらいてゆく努力は、その苦斗が大きいだけに考え直さねばいけない。家も建てねばならないし、井戸水もほしいし、何よりも種物が必要だ。

(4) 開拓と一口に云うが、その苦しみは今でさえ並大抵のことではない。考古遺物だけで観念的に教えるのでは生活の苦しみは分らないだろう。むしろ現在の開拓から先に知るべしと云うのはこゝにあるのだ。生活単元と云うのかどうか、とに角、歴史的発展の段階を、時間に従つて道具によつてのみ説明するのでなく、生活の展開向上の段階に忠実に従つてさらに道具を比較し、社会構成を考えて、時間的に再編成

してゆかねばならない。丁度文化圏説が地理的分布とその変化を時間的に再編制して歴史的説明している様に、しかも生徒たちの実際出来る知識から入つてゆかねばなるまいかと思う。そういう意味から私は先ず開拓の実際を調べて見た。

二、開拓の苦しさ

実例として適当かどうか、その一例として、私がこれ迄五年間かならず毎年一回か二回訪れて、私自身の目でその変遷を見、またその努力を知つている部落をとりあげる。玖珠郡森町の池ノ原開拓団（一〇戸）である。私は二十五年の夏に始めてこゝを訪れたのだが、この部落が入植を始めたのは二十四年の三月からであり、同十二月に勢揃いが出来たので、実際には二十五年二月頃から開墾にかゝつている。以下少しくその模子を年代順に記して見よう（団長の高浪・長尾の両氏より聞いたものを元とする。）

二十四年度

当時は台地は森林地帯で松やクヌギが生茂り、雑草の間をとても一人では歩けないほどだつた。開拓団の一〇戸が一丸となつて伐木や建築に当つた。先ず家を建てねばならないのだ。一本々々を台地の下から現場まで皆で引きずつて運んだこんなに苦労して折角建つたものがデラ颱風で全壊して、今一度建て直しをせねばならなかつた。昔作つた古井戸が一つあつたのを元にして十三間の深さ迄たつしてやつと水があつた。この井戸一つがたのみの綱になつたわけである。しかしこの年は一戸で二軒家を建てた計算になるほどこれに追われお金もなくて、カンコロ（イモノ粉）を食べてやつと働いたしかし現代のことだから補助金や特融もある。そのお蔭で電燈も引けた。

二十五年度

二月から開墾にかゝつた。此年約四反ほど焼畑で作物をうえたが、ベト病で全滅した。此年に道路作りと共同作業場（精米・麦・粉）の完成とがあげられる。作業場は日出生台兵舎の払下げをうけてそこから引つぱつて来た。

二十六年度

森町行きの北側道路を完成し、さらに二十七年にかけて南側の道路を完成した。地元の高校生も援して働いた。全長一、五〇〇米のトラックの道路が出来たわけである。岩盤で水滑りする急坂や赤土の段々坂を上り下りしたことを考えると全く隔世の感がある。全く涙ぐましい。

二十八年度

十三号颱風で井戸が埋没してしまつた。台地の西側の下の谷へ（片道約五丁）水汲みに出かけることになり、毎日四、五時間ずつが水汲みにとられた。この為に新しく水を引くことを計画した。

二十九年度

五月頃に水道完成。角埋山から直接に引水したのである。人生の中でこんなにうれしかつた事は少いと云うのが皆の一致したところである。この間、毎年約二反ずつ開墾をすゝめており、三十年三月に計画完了の筈で、そうすると耕地が約一町五反となる。他に薪炭・採草地が一町五反あつて、一戸約三町・計三十町歩の開拓団入植が完了することになる。作物は野稲、麦、ソバ、イモ、大根、落花生等の如く殆んど普通の畑に近ずいた。生計の見通しから果樹栽培にかゝり、多い家では六反も梨子畑になつている。来年頃からボツ〳〵売れる様になるだろう。之からが楽しみだ。

開拓団は十戸で家族人員五十四人、実際に働ける人員二十四人で、小さな子供が多いが大体に開墾の成果をあげて来ている。

どうやら開拓の苦しみは一応の目鼻がついた。やつと生活の根がおりた。苦しいながらも之からは明るく楽しい見通しがある。丁度そこに自衛隊の誘置問題が起つたのだ。野稲の收穫のよろこびもどこへやら、麦を植えつける元気も出ないで人生の夢を見つめていると云つた状態だ。

甚だかんたんに経過を見て来たが、勿論この様な開拓は開拓一般とも異なるだろうし、また井戸埋没が逆に森町よりも早く水道完成となつて文化村への契機を生み出したりしているし、現代的である点で、歴史的な村の起りにそのまゝは利用出来ないだろう。しかし森林開発によるゲルマン共同体やまた村における水を中心とする共同体のあり方やなどゝ云う様にいろ〳〵考えて来ると、大いに参考とされる点がありはしないだろうか。

なお、社会意識のアンケートを働きうる二十人に試みたが、その結果は一般農村と殆んど差は見られない。標準偏差と相関係数によつて之を示すことが出来る。しかし生活向上への意慾は甚だ高く、「開拓者精神」とも云うべきものを如実に見て私達の方が励まされる。

三、遺跡との関係

なお、最後に見逃してはならないのは、この台地は北の角埋山（つのむれ）が中世の城あとであり、その東南麓に銅鉾が二振出土しているし、その南（即ち台地の北半）の一帯は石棺群周土地帯で、台地の西南側が彌生期の住居址群地帯である。銅鉾と石棺と土器とは大体その年代を等しくするものと思われるし、まさしく開拓団の苦しみ以上の苦斗が二千年以前にこゝで行なわれたことを示している。

住居址群の地域内では、土器片だけでなく石庖丁が数多く見られ、私の知つている限りでも七個に及んでいる。石斧は

無数と云つてよい。石鏃に使つた黒耀石（この分布は創刊号の竹長氏の論文を参照されたい）はヒメ島産系のものが多いが、今度アソ産系のものを三片拾集した。その場所はほゞ限定されている様である。

さて、ムラ＝住居址群が当時どこから水を得ていたか、それを解明することは重要な課題であるし、石庖丁の存在が野稲の耕作を示すものか台地下に水田耕作をしたものかの両面からの検討もされねばなるまい。

なお、台地上には古墳後期の円墳も二、三あつたとのことであるが、六十八町歩に及ぶ開拓（地元の分も含む）によつて、今は千人塚中央にたゞ一つ残つているだけである。この時期の古墳はむしろ川をへだてた玖珠町に数多くまた、そこの水田から時折り石庖丁が出たり彌生後期の土器も出ている。こちらの方は水田耕作にも好適の地であつたことは地形からだけでも比較されよう。（未完）

ちなみに本号前出の佐藤節氏の論文は、この池ノ原台地の南西麓にあつて水損の多い川沿いの四日市部落を研究したものである。ムラが近世において如何なる姿をとるに至つたかを知る力作であり、参考にされたい。　―一一・二三―

（大分大学学芸学部助教授）

（あとがき）編輯会議後に早急に筆をとつた為、書き直す余裕もない。果してゞ教材研究ゞと云えるかどうか。とくに現場の先生方のきびしい批判と御教示をいゞきたいと思う。

この欄は一番必要でありながら意見が少ない。なるべく数多くの意見を交換して、皆の手でこの欄を充実して行きたいし、この雑誌を私達皆んなのものにする為に、遠慮のない御投稿を切に御願いする。

郷土史話

画家の秋聲、別府で美人の尻を追ふ

明治十八年播津生れ、谷口香嶠の門下、小早川秋声が京都から音に聞く別府温泉に写生に来たところ、到る所に裸線美や裸体美が転がつているので有頂天になつて喜んだ。ある日、一温泉場へ行くと、八頭身美人が後向きになつて立つているのが、ふと氏の眼に止まつた。その後姿が何とも言へない情緒があつたので早速写生して置かうとしてスケッチブックを出したが、相にく木炭も鉛筆も忘れて来たので「エエ仕方がない。とは言へ、みすみす此の美人を逃がすのは残念、手を空しうして歸るも残念」と一心に眺めて、序でだ、どんな女か前も見てやれと、とんだ野心を出したのが失敗の因。前にまはつて見ると、ダア！　取つて喰いつきさうな跡ら顔の出歯女、後姿の曲線美はすつかり奥ざめてしまつた。そして「写生はあまり深入りすると失敗する、伴いと思つた以外さがすものでない。」と忽然と悟つたと、「古今趣味の書画骨董」という本に書いてある。

（立川）